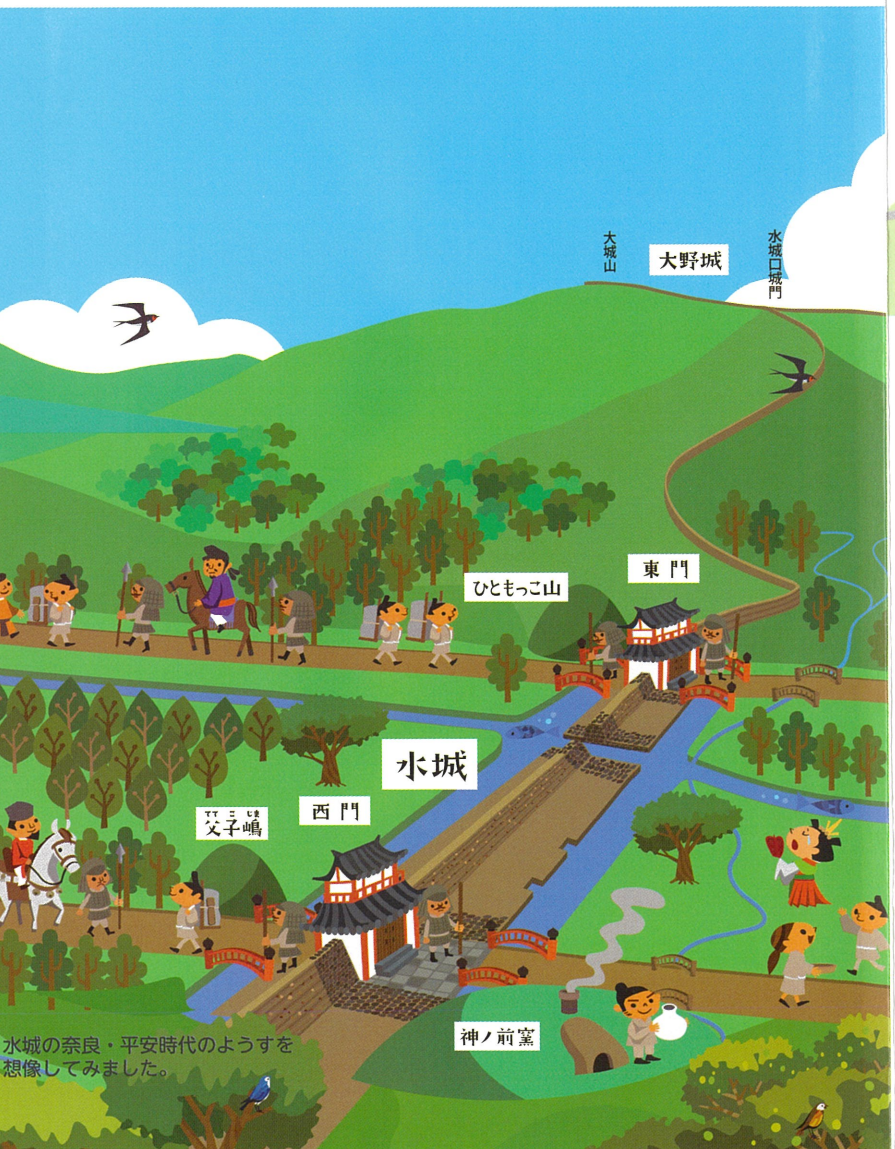


水城はなぜつくられたか？

7 世紀後半の朝鮮半島では国の存亡をかけた戦いがくり広げられました。新羅は唐と結んで百済や高句麗を滅ぼしました。



当時の日本は百済を助けるために大軍を送りましたが、西暦 663 年の白村江の戦いで新羅・唐の連合軍に敗れました。その後、ヤマト朝廷は、朝鮮半島に最も近い福岡平野に大野城や基肄城を築き、防人が置かれる事態となりました。そのような中で西暦 664 年に水城が築造されています。





特別史跡 水城跡

指定年 史跡；大正 10（1921）年 特別史跡；昭和 28（1953）年
所在地 太宰府市水城、国分、吉松ほか
指定面積 25.7ha うち太宰府市内 160,563.96㎡（2018年3月現在）
備考 水城跡は、「日本遺産」の構成文化財の一つです



日本遺産
古代日本の「西の都」～東アジアとの交流拠点～
（くわしくは <http://www.dazaifu-japan-heritage.jp>）

発行： 太宰府市教育委員会（文化財課）
〒818-0198 福岡県太宰府市観世音寺 1-1-1
tel092-921-2121（代表） bunkazai@city.dazaifu.lg.jp
発行日： 平成30年（2018年）3月19日

表紙写真；南上空から見た水城跡（画像提供 大野城市教育委員会）



歴史的構造物としての水城

-土塁の版築作業（想定）-



水城復元模型部分
(原資料 九州国立博物館蔵)
(写真提供 九州歴史資料館)

水城は長さ 1.2km、幅 80m、高さ 10m の土塁と、内外に水をたたえた濠からなり、福岡平野の最も狭くなった場所をふさぐように築造されています。

「版築」と「敷そだ」

土塁には土と砂が整然と積み重ねられた層があり、いわゆる「版築」と呼ばれる工法で作られました。また地盤が軟らかい箇所には生木の枝葉を敷き詰める「敷そだ」という工法が採用されていました。これらの方法は中国・韓国の古代土塁にも類似した例があり、技術の系譜がうかがえます。



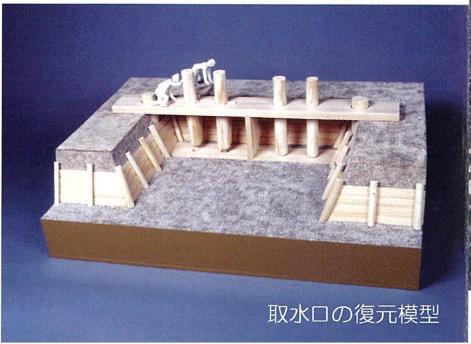
版築と敷そだ
(写真提供 九州歴史資料館)

「木樋」

土塁の下には内濠と外濠をつなぐ木製の導水管である「木樋」が設置されていました。木樋は長さ 80m、内法が幅 1.2m、高さ 0.8m を測り、厚さ 30cm ほどの板材を組み合わせ、底には枕木が敷かれていました。内濠には木樋と交差する取水口があり、他の事例から複数の流入口をあけることで流す水の量を調整していたと考えられます。



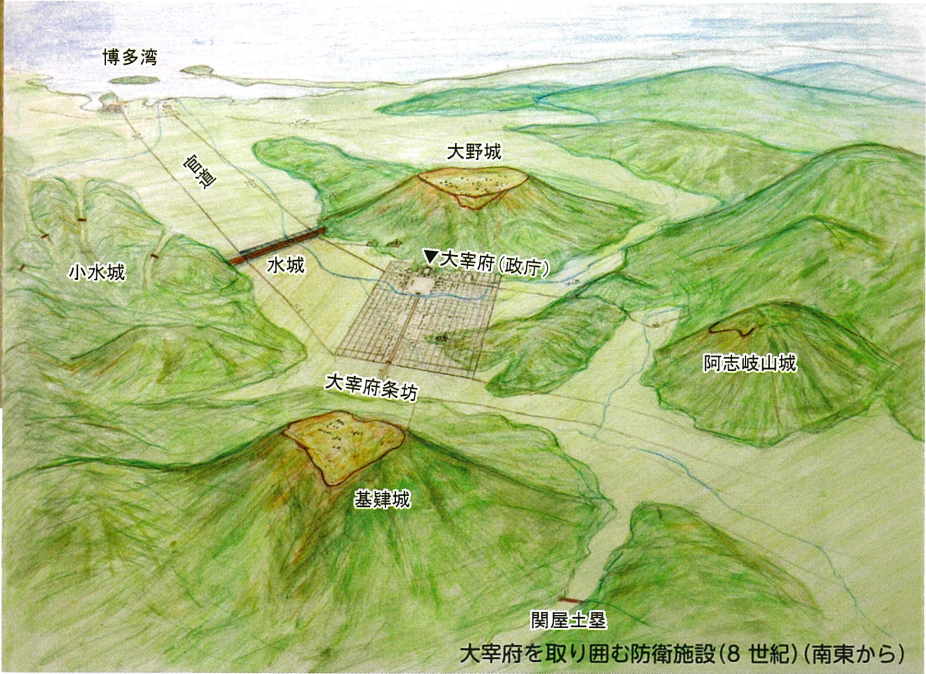
木樋の取水口
(写真提供 九州歴史資料館)



取水口の復元模型

大宰府と水城

水城は大宰府の前面（大陸・博多湾側）に設けられ、城壁としての役割を果たしました。大宰府への正面入り口の関所としても機能しており、外来者はここを通過して大宰府に入りました。



古代官道と水城

西門から延びた古代官道（公的に管理された直線道路）は迎賓施設の 筑紫館（鴻臚館）へ、東門からは博多に至り、海を通じて都や諸外国とつながっていました。



博多湾から見た水城と古代官道（北西から）

往来の場 水城の門



多くの人々が行き来をした水城の門は文献にもたびたび登場し、ここで詠まれた歌も残されています。万葉集に登場する大伴旅人と児島の離別の歌は、水城館前広場の歌碑にあります。

遺跡化した水城

水城は蒙古襲来（文永の役、文永 11 年（1274））以後、防衛施設としての機能を失います。しかし、中世～近世にかけて人々の記憶に残り、この地域の名所となりました。

地元の人々に守られた水城は国の指定で特別史跡（水城跡）となり、周辺の景観を保持しながら文化財として保護されています。



水城跡 土塁（東土塁）



水城跡 東門礎石（東門跡）



土塁断面ひろば（中央土塁）



水城ゆめ広場（西門周辺）